

明治を生きる

松尾ちよ子

明治を生きる

昭和四十一年十二月十五日発行

定価 四三〇円

著者 松尾 ちよ子

発行者 梅田 幸雄

発行所 株式会社 桂書房

東京都千代田区神田
錦町三の十五 加藤ビル
振替口座東京四四三五四

印刷 常盤印刷株式会社

目

次

学問に魅せられた武家娘

○宣言○青雲の志○ある誕生○出京○三つ子の魂○アル
バイト学生○イエス・ノー○新しい女○士族の血潮○先
駆者たち○母の死○日清戦争

海を渡るロマンス

○水平線の彼方○理想の男性○出会い○たそがれのサン
フランシスコ○神の前に契る○大野川のほとり○日露開
戦

華麗なる一頁

○ロシヤ町○満鉄だましい○兎狩り○子宝○裏切り○不

幸は友を連れてきた○鮮かな報復

緑なる六甲の山々

○御影の浜○鬼っ子誕生○二円の弁当○おさつのしっぱ
○火の手が上る○矢島かじ子女史を迎えて○未知の世界
○誘拐さわぎ○やさしい人○いきな黒堀○氣うつ病

理想を求めて

○ハイカラさん○湯煙りの中○うそつき○滝道の洋館○
頭でっかち○明治の教育ママ

道は遙けし

○夜逃げ○郷愁○男一匹○鹿鳴館の夢○田舎芸者○二号
さん○つむじ風○馬の骨

傷心の日々に

○丸鬚匂う○売れない本○酒宴○妾の子○荆の道

夢よ、再び

○反逆○上野の森○つけ鬚の乙女○ダンスホール○金策
○パーティの夜○悩み多き青春○死の対面○ライバル意
識○夢よ、再び○風雲急を告げる

旅路のはてに

○初孫○つきあいを禁ず○老のかげり○開戦○不運の星
のもと○銃後のあけくれ○東京にのこる○旅路のはてに
○別れ

淋しいフィナーレ

○戦い敗れて○自分の穴にとじこもる○故郷を恋う○双
子誕生○突然の死

あ と が き

学問に魅せられた武家娘

宣　　言

それが私のいくつの頃の出来ごとだったか、またどういふいきさつで母がそういうことを突然言いだしたのか、とんと記憶に残っていない。ただ「あなたは、私の歴史を書くべきです。あなたは偉大なあなたの母のことを、後生に伝える責任があるのです」という言葉が、なんとも奇妙な、しかし強烈な印象を私の心にうえつけたのであった。

凡人の私は驚き、とまどい、あっけにとられ、母が少々気がおかしくなったのではないかとうろたえた。しかし母は正気だった。そしてその声は天来のひびきの如く厳かに、避け難い力をもって私をがんじがらめにしてしまったのである。

「私は大変苦勞してあなたを育てました。その海よりも深く、山よりも高い母の恩について、偉大な母の愛を後世に伝えなければならぬのです」

これが母の言わんとする趣旨だが、私はいたくこの高圧的な命令に反発を感じた。反抗期だったせいがあるかもしれない。

「冗談じゃない。頼んで生んでもらったわけじゃあるまいし、それを恩きせがましく一々苦勞して育てた育てたといわれる筋合がどこにあるのだろう。生んだら育てるのが当り前じゃないの親なんだもの。それをなんだろう、伝記を書けの、偉大な母だのって、第一押しつけがましくて、うぬぼれも甚だしいったらありやしない」

口に出してこそ言わないが、内心私は大いに母の言にたてつき、とどのつまり「誰が書くものか」とかたくななまでに、白い眼をむいて小さくふてくされていた。

その私が、母という一人の女性に、一人の人間に、人間として異常な興味を感じだしたのは、母の死後のことである。私が次第に年令を加え、母の年に近づいてきたためかもしれない。

しかし今でも私は当時のように、母から命じられて書く気はさらさらない。ただ私の中から、母なる女性の生き方をなんとしても書きたいと思う気持が、日を追って強くなってくるのを、私はどうすることもできなかった。結局結果においてはその一生を書くということになっ

てしまったが、これも母へのひとつの供養といえるだろう。

もちろん母が私に命じたのは、賢く偉く美しい、欠点のない神のような理想像であり、進歩

的な才女、賢夫人、慈母の姿であつたにちがいない。しかし私が意欲をそそられたのは、もっと人間らしい点である。つまり明治のはじめに生れて、語学をはじめ保育学、家政学、室内裝飾まで学んだ進取の氣象にとんだ、しかもキリスト教的なピューリタンの思想を堅持し、完全な一夫一婦の理想像を終生求めつづけた一人の女が、明治という日本の画期的な變動期を苦悩しながら生きた姿である。

正しいことを正しいと語り、人間として正しい生き方を求めることが当時どのようなきびしいものであつたかは想像にあまりある。

妥協することをしなかつたためにより一層苦しまねばならなかつた母に同情するとともに、死ぬまでかえなかつた信念というか、しんの強さを、いいにつけ悪いにつけやはりみごとだつたと思わずにはいられない。困難に自らぶつかりながらこれをのりこえ切り開いていった勇氣はとても現代には求められない尊くすさまじいものである。

それだけにその強烈な個性ゆえに、いくたの人間臭をぶんぶんとさせる矛盾した面ももつていたし、まわりの者は、身近な者ほどそのとばっちりをうけたが、そのためにまた反発して自分の道を切り開いたり、比べて自分を反省することもできたことを思えば、その矛盾も強烈さもある難いことといふべきだろう。女性の先覺者の一人として、もし現代に生きていたら、十二分に能力も發揮できたし、欲求不満にならずにすんだのではなからうか。

「こんなはずではなかった」と地下の母は不肖の私に目をむくことだろうが、しよせんどんな時代にも、先覚者は、いばらの道を歩まねばならぬものである。

さて、こういうわけで、私は母のさまざまのことを知りたく、八十六才の高令でなおかつ元気に暮している母の知人に会うべく、母の生れ故郷、金沢を訪ねたのである。

青雲の志

「まったく変ったお人でした。とにかく金沢師範を出なさって、しばらく学校教えとりなさったが、何を思われたか、ぜがひでも東京へいくと決心されて上京されたもんです。それも当時は乗物もない頃とて、歩いたりかごなどに乗りながら東京までゆかれました」

「まあ歩いてですって！」

「そうなんですよ。金沢から東京まで歩いて上京されたというんで、あたしらもびっくりしたと、うちの年よりなんかもいいいりました」

明治二十年頃の話である。宿場宿場で泊りながら、米原、大垣、名古屋とでて、東海道五十三次を双六のように上ってきたという。

私はただただ驚きあきれた。

「目的はいったいなんだったんでしよう？ いやな結婚とかなんか―」

「とんでもない、男衆は眼中におかれんようにありました。なんでも青雲の志にもえたぎって勉強して外国へいきたいとかいうことも話にきいちやりましたが―」

当時、青雲の志にもえて上京するのは殆んどが男子に限られていた。

しかし向学心にもえた変り者の女性も中にはいたようである。当時の新聞雑誌九六号にこんな記事がのっている。

「年の頃十七、八にして、粗衣散髪、脚半草鞋を着たる旅姿の者に出逢しに云ふ。妾は信州の産にして名を賢達と云い年来洋学に志あれど、父母之を許さず、因て此度ひそかに家を夜にげして出京せり、是より高名の福沢先生をたづねて教育を乞ふと思へり、願わくはその宅を教へたまへと。時己に黄昏に近く道路も遠ければ、東両国駒止橋側売酒渡世藤屋某はその女子の親類なる由をきき、その宅につれ届けたりしと云ふ。如何なる奇女子にや、其後の様子詳悉し難し」

つまりこれを母の姿と思えばまちがいない。散髪というのは髪を切っていたのではなく、女とみられては道中危険なのでいわゆるさんばら髪にしていたことをいうのではなからうか。昔は女は夜道を通る時さんばら髪にして櫛をくわえて歩いた、つまり鬼女夜行のいでたちだったときくが、まさにそれを地でいった道中というべきだろう。

母の得意とする、ご主筋に当る加賀百万石の藩主前田公の姫君漢子姫が、外交官夫人として華かな話題をまかれたけれど、母の方が十才年上だったから、上京を決意した頃はまだ十才前後のお姫様であつてみれば、漢子姫に刺戟されたわけでもなさそうである。私はやはり、明治四年、母が生れた年に日本最初の女子留学生として渡米された津田梅子、山川捨松ら五人の女性が、明治十四五年頃ちようど母が十才頃帰国されているが、その壮挙が、東京をはるかはなれた城下町にも、風の便りに伝つて、大いに後につづかんものと発奮したのではなからうか。今はその心をきくすべもないが、私にはそれがなんといつても一番の刺戟になったように思われるのである。

あ　る　誕　生

明治四年、北の雪国石川県金沢に一人の女の児が生れた。長い灰色の冬から解放された雪国の人々にとって、久しぶりに青空を仰ぎ、深呼吸をして生きている実感をしみじみと味わうような初夏の朝のことである。加賀百万石前田家の中ぐらゐの家老の家の男二人女二人の四人兄妹の末娘として、夏緒と名づけられた。

夏という季節が雪国の人々にとって印象深い季節であるために、その夏に生れた女の児に、

特に夏という字をつけて夏緒と命名した。変った名前の子の兄は、不思議なことに生れながらに名前のように変った星のもとに運命づけられていたようである。

夏緒の生れた明治四年、それは近代日本の歴史が新しい歩みをはじめたばかりの時、実質上廃藩置県が行われて、新しい明治政府が日本全国の土地を直接支配するようになった、日本の歴史の中で、最も意義深い新時代の黎明期であった。

これより先き慶応三年十月、徳川慶喜の大政奉還が行われ、つづいて明治二年六月、版籍奉還が行われたが、この藩制改革によって、藩直属の身分のものは士族という名が与えられた。そして夏緒の生れた明治四年には廃藩置県によって古い幕府と藩の体制が崩れ去って、中央集権的な新しい国家体制、近代日本の国づくりができたのである。

翌明治五年、義務教育制度が実施され徴兵令がしかれ武士階級は解体されたため、夏緒の父も長兄も警察官として生計の道をたてるようになった。これは好むと好まざるとにかかわらず当時一般武士に与えられた生活転換の一つの道だったのである。署長で十円ほどの月給をもらっていたが、玄米一石が七円八十錢ぐらいの時代に、次男と娘二人を抱えて長男は警察官として働いてはいるものの、生活は決して楽ではなかった。

明治のご維新の変動期に生れあわせたことによって、もって生れた夏緒の進取的な新しい女としての芽は、かえって勢よく発芽したともいえるだろう。明治のご維新は封建制をたおし、

近代民主主義と男女平等の旗印をかかげたけれども、封建色の強かった加賀藩の家老の家に生れ、ご維新によって急に貧しくなつて環境ががらりと變つても、士族という見識が身にしみついて、そこから一生ぬけだすことのできなかった夏緒は、自分をとりまくさまざまな矛盾に反発した。貧しいことにも、そして女なるが故に男の足下に甘んじ、たんに子供を生む道具であり、腹は借り物、夫の子を育てる乳母でしかなかった今までの女の立場に、なんとしてもがまんがならなかつたのである。

「多くの女子たちについての学校教育は遅々としか進まないのに、上層階級の女子の中には、海外へ留学するものもあらわれた。明治四年十一月、吉益亮子、上田真子、山川捨松、永井繁子、津田梅子の五人が留学したのがはじめてである。この人たちは明治十四、五年頃に帰国した。今まで家にばかりとじこめられていた女子の一部が、とにかく外国に出かけてまで教育をうけてきたのは『開国』と『進取』の氣運を反映するできごとであつたし、日本の女子教育にある程度の刺戟を与えたこともたしかだつたらう」

玉城肇著の日本教育発達史にみられるとおり、夏緒はその刺戟をもつとも強くうけた一人だったのである。

「津田梅子が八才でいったんだから、あたしだっていけなくはない。勉強さえすれば！」

五人の女子留学生が帰国した明治十四、五年頃には、夏緒はまだ十才の少女だつたけれども、

小さいうちから才氣のあふれている少女だけに、自分より二才も年下の少女の留学は、十才の夏緒の関心をあおるのに十分だった。

「当時の生徒の気風は、大体においてなかなか積極的であつたように思われる。女子だからといって負けてはいないぞという気概があふれていた。とにかく一般に積極的で、快活で、女子の教育を進める上において非常に力があつた」

つまり強烈な個性をもつた、今までの女性にみられないタイプや気風の女性が生れでる土壤ができたはじめていたのである。

出 京

明治十六年、環境の激変にたえかねたように夏緒の父は倒れて帰らぬ人となった。夏緒の十才の時である。警察官になつた長兄の世話になつて、それでも学問好きだといふので苦しい中から金沢師範までしてもらつたが、在学中にすぐ上の姉が他界して女一人となつてしまつた。そして十八才の年から学校に奉職した。しかし城下町とはいへ、日本国の首府のある東京からははるかに離れている、眠つたような静かな、いわば活気のない田舎町だ。こんな所で一生をおくりたくない——というわけで、夏緒が生れ故郷の金沢を後に単身東京へでてきたのは、

教育勅語が發布された翌年の明治二十四年の暮のことだった。

「二十才にもなって、今さら東京へでて勉強することには、わたしは反対します。またそんなゆとりなぞありはしません」

長兄も兄嫁も頑として賛成しなかった。夏緒もまた頑として自説を主張しつづけた。優しく地味で穏かだった母は、世話になっている兄夫婦の手前もあつたが、なんといっても利発で才気あふれる末娘がいとしかつた。ことに父を早くなしてからというものは、いきおい夏緒の言いなりになる甘い母親でもあつた。母は、長兄はもちろん、こぞって反対する親類、縁者の前で手をついてこういった。

「たとえわたくしがとめたとして、いったん決心した気持を変えるような娘ではございません。小さい頃から学問の好きな、ようでける娘でございました。何卒わたくしに免じて、本人の希望どおりさせてやって下さいまし。経済的にも面倒はかけんというりますよってどうかお願い申します」

気の弱い母は、自分にはない進取の氣象のかたまりのような娘の気持がわからなくて不安ではあつても、半面他の兄弟にはみられない頼もしさを感じるのだった。

上京した夏緒が予定どおりまず身を寄せたのは、昔夏緒の家にいたことのある女の縁づき先きだった。身のおきどころのきまるまで仮の宿を頼んだその家は、湯島神社にほど近い町中に